

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：34426

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720400

研究課題名(和文) 現代バングラデシュの「教育第一世代」による「青年期の創出」と社会変容

研究課題名(英文) The New Adolescence of "The First Educated Generation" and Social Transformation in Contemporary Bangladesh

研究代表者

南出 和余 (MINAMIDE, Kazuyo)

桃山学院大学・国際教養学部・講師

研究者番号：80456780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：1980年代後半以降のバングラデシュの特に農村部における急速な教育普及は、現在の20歳代を境とした世代間に、教育経験における大きな差をもたらした。バングラデシュの現在の若者たちは「教育第一世代」として、親世代の経験とは異なる青年期を過ごしている。本研究では、このバングラデシュ農村部の教育第一世代に見られる青年期の実態を捉え、彼ら彼女らの学歴形成から「都市出稼ぎ」あるいは「結婚」への移行期について検討した。都市と農村を行き来する若者たちの経験は、すでに家族構造に変化をもたらし、また将来の農村社会構造にも変化をもたらす可能性を帯びている。

研究成果の概要(英文)：Since the latter half of the 1980s, primary school education has rapidly expanded in Bangladeshi rural society and school education has become familiar to people. Children who were born in the 1980s have started going to school where their parents had no such experience. Their childhood and nowadays' adolescence has been dramatically changed over a generation. My research project focused on these changes; what kind of impact their school experience has brought to their lives, and how their adolescence have differed from those of the previous generation.

My anthropological subjects, who sat in their fourth grade classroom at school in a village in 2000 and 2003, are already 20 years old. A few of them continue to go to school, many boys are working as urban migrants, and almost all the girls have already married. The ways of their transition from education to work or marriage symbolize their adolescence and their negotiation leads the transformation of social structure in Bangladesh.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：若者 青年期 教育第一世代 都市出稼ぎ バングラデシュ

1. 研究開始当初の背景

1971年の独立以降、バングラデシュは、貧困対策を念頭においた社会開発と経済発展を一途に推し進めてきた。特に1980年代後半から国家やNGOが強調してきた教育普及が功を奏し、初等教育の就学率は9割を超えるまでに成長した。そうしたなかで教育経験を得た現在20歳代の若者たちを境に、とくに農村部では、世代間の教育経験に大きな差が見られる。現在の若者たちは「教育第一世代」として、親世代が経験してこなかった学校教育を受け、その経験を基に、都市や海外への出稼ぎをはじめ、新たな社会変容を経験している。

2. 研究の目的

本研究は、バングラデシュの教育第一世代を対象に、彼らの教育経験がどのような進路を導いているかをまず明らかにする。そして、彼らが創出する「青年期」の特徴と、その経験がもたらす社会変容の可能性について検討する。具体的には、

- 青年期における進路の実態と意識
- 教育第一世代の経験が農村社会にもたらす影響と変化
- 個人のライフコースにおける「青年期」創出の意味

に着目する。

経済成長著しい社会において、若者たちがいかにその影響を受け、また青年期の経験がいかなる社会変容をもたらすのかを検討することが、本研究の目的である。その際に、日本の高度経済成長下における若者の都市移動の議論についても参考にする。

3. 研究の方法

本研究は、現地調査をデータ収集の主な手段とした。

報告者は2000年からバングラデシュ中央北部ジャマルプール県の一農村において長期フィールドワークを重ね、開始当時(2000年および2003年)小学生であった子どもたち計38人を対象に、彼らの子ども期について調査をしてきた。本研究においても対象の中心としたのは、その頃から信頼関係を築いてきた若者たちであり、彼らの現状を、移動先まで追って捉える。調査では、若者たち各々の生活実態(農村と都市)農村を離れている場合、都市と農村の往來の頻度青年期のターニングポイント(結

婚や就職)の判断過程と、その決定要因における学歴の影響

教育第一世代が描く将来の展望

を中心に聞き取り調査をおこなった。また、計画当初は予定していなかったが、多くの若者たち(とくに男子)の出稼ぎ先である都市部の縫製工場において、若年労働者を対象にアンケート調査も行った。

本研究における調査期間は、2012年8月から9月の1か月、2013年2月から3月の2週間、2013年9月の2週間、2014年2月の2週間の、計2か月半である。

調査に際しては、報告者のこれまでの実績からビデオも活用し、成果は論文と映像作品の両方で発表することを試みた。

4. 研究成果

(1)まず、対象とした38人の農村出身の若者たちの進路状況を図1、2に示す。

5年間の初等教育修了後、多くが中等教育に進学するが、前期中等教育10年生まで終えるのは約半数である。わずか3年の違いであるが、後期中等教育(カレッジ)への進学者は2003年組(図2)の方が若干多い。これには、10年次修了時に行われる前期中等教育修了試験(Secondary School Certificate: SSC)の合格率も関係している。



図1: 2000年に小学4年生だった若者の進路

出典: 現地調査により報告者作成



図2: 2003年に小学4年生だった若者の進路

出典: 現地調査により報告者作成

ケース数が少ないのでここから一般傾向を述べることはできないが、各々に見られる教育離脱時点の状況やその後の進路から、青年期の行為選択としては、結婚、都市への出稼ぎがあることが分かる。興味深いのは、教育からの離脱とそれらの間に「何もしていない」「ぶらぶらしている」(と彼らが認識する)期間があることである。また、教育からの離脱と結婚や出稼ぎは常に一方向ではなく、結婚後も通学を続けていたり、一旦都市に出た後に再び帰郷して復学したりといった「移行期」が存在することが明らかとなった。

(2) 女子の進路で言えば、教育からの離脱は往々にして結婚に繋がっている。しかし本調査では、結婚が「原因」で教育から離脱したというケースは見られず、教育から離脱の後に縁談がもたらされるのが大半であった。また結婚への移行は、10年生修了時のSSC試験がターニングポイントとなる場合が多かった。すなわち、10年生修了後にSSC試験を受験し、結果を待つ数か月の間に結婚する者や、試験が不合格であったことを機に教育から離脱し、その後まもなく結婚する者などである。反対に、SSC試験に合格すれば、結婚しても教育を続けるケースは珍しくない。その場合、女性は婚家に移り住まずに実家から通学を続けることも多い。それを可能にしているのは、次に述べる夫の単身都市出稼ぎによるところが大きい。

農村部における女性の初婚年齢は都市部に比べると未だ早く、10代後半から20歳未満である場合が多い。しかし、本調査で見られた状況からは、結婚が教育の機会を妨げているとは一概に言えない。むしろ親たちにも、娘が教育を続けていれば、学歴形成の節目まで結婚させないという意識が定着しつつある。また、婚姻後も教育を続けることを、実家の親たちだけでなく、婚家の家族も反対しない状況が見られた。それは「将来子どもが生まれれば家で子どもの勉強を見られる」といった賢母思想に支えられた受容でもあった。一方の女性たち自身はというと、教育を維持することが彼女らのネットワークを広げ、また結婚後も実家で生活することの大義名分にもなっている。

(3) 男性に関しては、首都ダッカとその近郊に急増する衣料品縫製工場が、若者たちにとって容易に職を得る契機を導いている。バングラデシュにおける縫製工場の増加は1980年代後半から徐々に進んでいたが、とくに近年の世界的な不況と中国における労働賃金上昇の影響から、バングラデシュの豊富かつ安価な労働力に世界中の企業からの期待が集まり、非熟練業の機会が急増した。調査地では、教育第一世代の若者たちが学校教育を通じて「非農業志向」を身につけて労働機会を求めることと、都市部でのこうした比較的簡単に就ける労働機会が合わさって、多

くの若者たちが都市へと出稼ぎに出かけるようになった。

しかし、縫製工場での賃金や労働条件は決して十分ではない。また、学歴が労働内容や賃金に意味をなすかたちで差をもたらすわけではないので、彼らは、学歴形成を経て縫製工場へ就職することに、ある種の葛藤を覚える。とくに教育に強い関心を持つ者は、学歴を積んで「よりよい就職(ホワイトカラー職)」を目指すことを望むが、一方で、ホワイトカラー職への就職の機会ごく限られており、学歴だけでは太刀打ちできないことをも理解している。また、労働可能な年齢になって収入がないことに葛藤したり、教育資金の限界を感じて教育から離れる者もいる。

都市出稼ぎと教育のはざまで揺れる若者の中には、一時的に都市に働きに出て試験の際には村(教育)に戻る者や、自らの教育を継続しながら、村で仲間とともに私塾を開いたり、家庭教師をして収入を得る者もいる。

都市出稼ぎによる収入が定着すると結婚する男性もいる。男女とも往々にして親が決めた相手と結婚するため、妻は近隣農村出身者が多い。調査で捉えたケースでは、結婚後も都市出稼ぎに出ている場合、妻を農村に残した単身出稼ぎが大半であった。女子のケースに見られた夫の出稼ぎにおいても同様である。縫製工場での賃金では都市部で家族で暮らすのは難しいのである。

(4) 都市部の衣料品縫製工場で働いている若者たちの労働状況、生活状況はどのようなものであろうか。調査地農村から都市に出稼ぎに来ている若者たちの都市での生活空間と仕事を訪れ、現状認識および将来の展望について聞き取りを行った。

また、ダッカ近郊の工場において、そこで働く若者たちを対象にアンケート調査を実施した。調査を実施した工場は、労働者200人程度の比較的小規模で新しい工場と、労働者1000人を超える1990年代に設立された外資系工場である。どちらも首都ダッカから車で1時間半ほどの郊外にある。質問内容は、出身先と学歴、都市での生活環境と労働状況、実家との往来の頻度、将来の展望である。

BGMEA(バングラデシュ衣料品製造業輸出業協会)によれば、2013年現在バングラデシュには5,600社の縫製工場があり、400万人の労働者が働いている。その大半が20代前半の若者たちで、労働者の6割以上が女性と言われている。調査を実施した2つの工場では、小規模な方の工場では男性が若干上回り、大規模な工場では女性が約6割を占めていた。縫製の各作業工程はジェンダー分業体制をとっており、布の裁断や品質管理、パッケージ、ニット製品のニット編み等を男性が担い、縫製ミシンを踏む工程やボタン付け等は往々にして女性が担っている。

労働者の学歴を調べたところ、小規模工場では表1のような結果が得られた。調査地出

表1：縫製工場で働く労働者の最終学歴

学歴	4年以下	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生	10年生	SSC	HSC	BA
人数	13	57	21	23	51	10	8	25	6	3

出典：報告者によるアンケート調査（2012年9月実施）

身の若者たちの葛藤にも見られたように、小学校を卒業していない者も中等教育を終えた者も同等に働いており、給与も特に初任給においては差がない。5年生、8年生、SSC試験といった節目まで教育を受けて離脱した者が多いことも分かる。また、6割の労働者が他の工場での労働経験を有しており、この工場での勤続平均は10か月であった。労働力の売手市場である縫製業では、仕事は引手数多く、経験をもって異動することで給与が上昇するのである。

彼らの都市での生活状況を見ると、縫製工場で働く男性たちの多くは未婚（工場でのアンケート調査では、未婚率は男性70.2%、女性48.6%）で、ダッカでは親戚の世話になるか、同郷者たち3、4人で長屋1部屋を借りて共同生活をしている。出身村との距離にもよるが、多くの若者たちが頻繁に実家に帰郷し、とくに年中行事等の時期には皆が帰郷すると答えた。調査地出身の首都近郊で働く男子たちは、2、3か月に一度は実家に帰郷していた。なかには毎月給与が出るとそれをもって帰郷する者もいた。また、縫製工場での工員業は大半が歩合制や時間雇用で、仕事が少ない時期は給与が保障されない。そのため、閑散期にはコストの高い都市で生活するよりも村で農業をしている方がよいと、一旦都市を引き上げたり、あるいは農繁期には村で農業に従事し、農閑期にはまた都市に働きに出るといった者もいる。

このように、若者たちの都市出稼ぎは明らかに「都市移住」ではなく「出稼ぎ」であり、彼らの生活基盤は農村で維持されていると言える。そして、農村社会においても経済消費活動は日々進行し、彼らが都市で稼ぐ現金収入は、もはや必要不可欠となっている。

（5）彼らの都市出稼ぎが必ずしも都市移住を意図しないとすれば、将来の展望について彼らはどのように考えているのだろうか。

工場でのアンケート調査において、将来の居住先として「都市」と「田舎（出身地）」を選択肢として提示したところ、8割以上が田舎を選択した。調査地からダッカに働きにきている青年は、「我々は村の人間だから、ダッカには働きに来ているだけ。5年働いたら村に帰って何か始める。何ができるかはまだ分からないけれど」と語る。彼は後期中等教育（Higher Secondary School: HSC）の試験にも合格したが、大学進学にあたっては、「それ以上働かずに学歴を積んだところによりよい仕事があるかどうか分からない」と言って、ダッカに住む親戚を頼って上京し、

縫製工場での仕事に就いた。都市に出る直前に「苦勞してHSCまで勉強したのに5年生修了者と同じ賃金なのは辛い」と語っていた。実際にダッカで働きだした工場では、親戚の伝手があったこともあり、品物管理という比較的歩合のよいポジションに就くことができたが、学歴というよりは縁故が力を発揮したといえる。

都市と農村の間を行き来している若者や、農村でインフォーマルセクターの仕事に従事する若者たちも、現状を「一時的な仕事」としか捉えていない。しかし、先にどのような仕事があるのか、今の仕事を将来どのように発展させようのかというイメージを持っているわけでもない。

一方、7年生のときに父親の急死により学校を中退せざるをえず調査地農村から都市縫製工場（Tシャツプリント工場）に働きに出た青年は、すでに7年間働いており、工場も7か所異動している。異動するごとに給与や条件は上昇している。彼は将来の展望について、「自分はこの仕事で生きていくしかない。村には母はいるが父はいないし、後ろ盾となる支援者もないから」と語った。

こうしたなかで、都市で働く若者にも農村にいたる若者にも共通する展望の一つは、「海外出稼ぎ」による経済上昇狙いである。現在、調査地の農村からも多くの男性が中東諸国を中心に海外出稼ぎに出ている。海外出稼ぎ者による送金は国内都市労働より額が高く、海外に出稼ぎを送り出す家庭は、家屋を煉瓦造りに建て替えたり、土地を購入したりと、経済成長が可視化される。「村で『よい生活』をするには海外出稼ぎで稼ぐのが手取り早い」という感覚が、若者たちの間にも浸透している。

（6）では、海外での労働は実際にどのようなものか。この点については本研究内で十分に明らかにするには至っていないが、1ケースとして、息子をギリシャへ送り出している調査地の家族とその出稼ぎ者についての調査を行った。ギリシャで働くパングラデシュ出身者が就く仕事は、ダッカへの出稼ぎと内実はほとんど変わらない。報告者が訪れたギリシャアテネのパングラデシュ人たちは、そこで縫製工場を営み、働いていた。国内都市と海外の相違はまさに賃金のみである。また、縫製工場での重労働かつ安価な労働が決して好印象に受け入れられているわけでない国内事情から、ギリシャで働くある青年は、「ダッカで縫製工場に働いていたら、なんだ、縫製業かとバカにされるけれど、ここ海外で

同じ仕事をしていても分からない。村の人たちは海外で働く者に敬意を持つ。海外で働くことのメリットはそれだけ。村の人たちから尊敬されること」と述べた。海外で働くことで、出身村に対して経済的成功を示すことが、彼らにとっての展望となっている。しかしここでもやはり、価値基準は村にあるといえる。

(7) 農村を離れて都市や海外へと出稼ぎに出る現在のバングラデシュの若者たちの経験は、今後のバングラデシュ社会、とくに農村社会にどのような変化をもたらすのだろうか。1つは、彼らが結婚後も単身での出稼ぎを続ける限り家族形態に変化がもたらされる。(2)で述べたように、婚姻後も女性たちが実家に残って学歴を積みうる原因の一つは、夫の単身出稼ぎによる不在状況にある。しかし、今後、都市での労働環境が徐々に改善されれば、家族をともなった都市移住の可能性も出てくるだろう。全体としての縫製工場の労働者には女性の方が多いことをすでに述べたが、調査地農村からも、夫婦でダッカの縫製工場働いている(子どもは村の両親に預ける)というケースも見られる。

経済成長下の若者の都市移動と都市での核家族化については、日本の1960年代の経験に何らかのヒントを見出しうると推測される。そこで、1960年代に見られた日本における「集団就職」の現象について、文献および報告者の身の回りの「団塊の世代」への聞き取り調査を実施した。

日本の経験に特徴的に見られたのは、中学校や高校の斡旋による都市就職の機会、つまりは学歴との直結である。また、都市から比較的近い農村部と遠隔農村の例を比べた場合、前者においては、バングラデシュの現在に見られるような、都市と農村間の頻繁な行き来が捉えられた。とくに小規模でも地場産業のある地域では、都市で一旦就職したものの1、2年で村に帰ってきて地場産業に従事し、そして再び都市に出るといった青年期が見られた。遠隔農村では往来は少なく、農家出身の若者であっても大半が都市へと働きに出ていた。「農業では食べていけない」というのが当時の通説で、親も農地を継がそうとは考えていなかったようである。そうした農村は現在深刻な過疎化に陥っている。

グローバル経済状況や国内状況の違いから、一概に1960年代の日本の経験と現在のバングラデシュの現状を比較することはできないが、現在のバングラデシュの若者の都市移動を考えるにあたって、何が彼らを都市へ誘い、また何が彼らを農村に留まらせるかを考えるうえでの視点を導くことはできる。

(8) 以上のように、「教育第一世代」の若者の青年期に目をやると、教育経験は彼らに確かに前世代とは異なる生活空間をもたらしている。それは、都市移動であったり、あるいは婚姻後の居住空間の相違であったりす

る。学歴が意味あるかたちで就職に結びつくには未だ限界があるが、教育経験が「非農業志向」をもたらし、個々の彼らのなかで意味をもって、将来の展望に影響を与えていることは明らかだろう。

今後の課題としては、1つは、彼らが彼らなりの展望から、村で、あるいは都市で、いかなる機会や生活戦略を形成するかを捉えることである。一つの兆候としては、都市の工場の一部を農村に部分移転して、農村での生活を保ちながら賃金労働を得るといった動きもみられだしている。

もう1つの課題は、教育経験がもたらす自己認識や社会関係の変化である。農村での生活を維持する彼女たちが、学歴形成をもとに、どのように自らを語り、また前世代と次世代の間に自らを位置づけるのかを今後読み解いていきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

南出和余、「若者にとっての都市の魅力、田舎の魅力 経済成長下のバングラデシュと日本の経験」、『第5回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議 高知県大豊町2013年11月8日~10日 報告書』、査読無、2014年、pp.37-41。

南出和余、「経済成長下の若者の都市移動 「わたし語り」の人類学の試み」、『桃山学院大学総合研究所紀要』、査読無、39(3)、2014年、pp.91-108。

南出和余、「シネコンに通う『ベンガルムスリム』」、『地域研究』、査読有、13(2)、2013年、pp.355-341。

南出和余、「映像を介した異文化理解教育の可能性 映像人類学の見地から」、『桃山学院大学総合研究所紀要』、査読無、38(3)、2013年、pp.75-93。

[学会発表](計5件)

Minamide Kazuyo, 'Children's Transition through the Lends,' in the Panel of 'Filming "Science Ethnography",' "International Union of Anthropological and Ethnological Sciences," International Conference Hall of Makuhari Messe, Japan, May 2014.

Minamide Kazuyo, 'Transforming Childhood in Bangladeshi Rural Society: School Experience and Their Life-Course,' "Childhoods in South Asia: Contemporary and Historical Perspectives," Australian National University, Canberra, Australia, July 2013.

Minamide Kazuyo, 'Practical Education for Environmental Awareness: A Case of Arsenic Contamination Issue in Bangladesh,' "Social Work, Social Development 2012: Action and Impact,"

Stockholm, Sweden, July 2012.

南出和余、「バングラデシュ経済成長下の若者たちの出稼ぎ経験」、日本南アジア学会第26回全国大会、テーマ別セッション「変貌するバングラデシュ社会の光と影 周辺から見た南アジア世界」、広島大学、10月・2013年。

南出和余、「『子ども』と映像 変化と記憶の共有」、日本文化人類学会第47回研究大会、分科会「映像の共有人類学—映像をわがちあうための方法と理論」、慶應義塾大学、6月・2013年。

〔学会等映像発表〕(計3件)

Minamide Kazuyo, 'A Life Suspended,' "13th Dhaka International Film Festival," Dhaka, Bangladesh, January 2014.

南出和余、「シムルの夢と葛藤」、日本南アジア学会第26回全国大会、ビデオセッション、広島大学、10月・2013年。

南出和余、「シムルの夢と葛藤」、日本文化人類学会第47回研究大会、慶應義塾大学、6月・2013年。

〔図書〕(計7件)

南出和余、「『子ども域』の人類学 バングラデシュ農村社会の子どもたち」、昭和堂、印刷中。

南出和余、「ヴェールを脱いでみたけれど バングラデシュ開発と経済発展の中の女性たち」、吉村慎太郎、福原裕二編、『現代アジアの女性たち』、新水社、印刷中。

南出和余、「『子ども』と映像 カメラへの関心と変化の共有」、村尾静二、箭内匡、久保正敏編、『映像人類学(シネ・アンソロポロジー) 人類学の新たな実践へ』せりか書房、2014年、pp.130-143。

南出和余、秋谷直矩、『フィールドワークと映像実践』、2013年、ハーベスト社。

Minamide Kazuyo, Shukutani Kazuha, et al., "Story of the Ghosts Living in Water (水に棲むおばけの話 環境教育のための教材 紙芝居)", 2012, Dhaka: Rubi Enterprise.

Minamide Kazuyo, Oshikawa Fumiko, eds., "Right to Education in South Asia: Its Implementation and New Approaches (CIAS Discussion Paper)", 2012, CIAS Kyoto University.

南出和余、「海外へ、都市へ バングラデシュ農村からの出稼ぎ家族」、京都大学地域研究統合情報センター編、『地域から読む現代』、京都新聞社、2012年、pp. 98-101。

〔その他〕

(1) 映像作品

南出和余、『シムルの夢と葛藤 A Life Suspended』、37分、Mini-DV、2013年。

(2) 書評

南出和余、(書評)「佐々木宏『インドにおける教育の不平等』」、『南アジア研究』、24号、2012年、pp.165-170。

南出和余、(解題)「岩田慶治『子ども文化への視点』岩田慶治編著『子ども文化の原像 - 文化人類学的視点から』」、加藤理編著、『叢書 児童文化の歴史』港の人、2012年、pp.313-315。

南出和余、(書評)「アン・アリスン著、実川元子訳『菊とポケモン グローバル化する日本の文化力』」、『研究 子ども文化』、13号、2011年、pp.70-74。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南出 和余 (MINAMIDE, Kazuyo)
桃山学院大学・国際教養学部・講師
研究者番号： 80456780